

夜も昼も

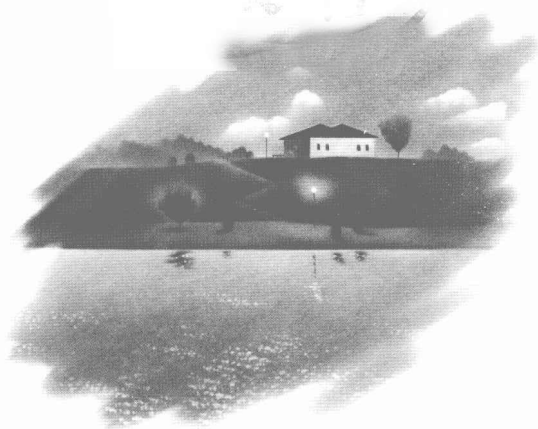
鎌田敏夫



夜も昼も

鎌田敏夫

江苏工业学院图书馆
藏书章



夜も昼も

発行日——平成二年十一月十五日　初版発行

著者——鎌田敏夫

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三―三

電話——営業　〇三―八一七―八五二―

編集　〇三―八一七―八四五一

振替——東京三―一九五二〇八　千一〇二

印刷所——旭印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

ISBN4-04-872620-X　C0093　Printed in Japan



夜
も
昼
も

装
画
黑
井
健

1

「お早うございます！」

慶子^{けいこ}が、ステップを飛び跳ね^はるようにして、中継車^{ちゅうけいしゃ}に飛び込んできた。

「お早う」

スイッチャーの宮本誠^{みやもとまこと}が、スイッチャー卓から振り返る。

「お早う」

ディレクターの村田正道^{むらた まさみち}も、そのそばから振り返った。

「今日の公式記録です」

慶子は、正道を無視して、誠に、紙を手渡した。公式記録というのは、その日の試

合に出場する全選手の成績が一覧表になっているものだ。

「アシスタントに持たせればいいのに……」

誠が受取りながら言った。公式記録員室に置いてある紙を取りにくいのは、アシスタントの仕事で、一カ月前の試合から、放送室のディレクターに昇格した慶子の仕事ではない。

「ついでがあつたから」

慶子は、誠の後ろからモニターを覗きこんだ。

「センターの画、近くなつたんじゃない？」

「今日から、新開発のカメラ……キャッチャーの顔がばっちりだろう？」

センターから、バッテリーボックスを映すカメラは、二カメと言って、中継のメインカメラだ。少しでも大きく明るく、選手の表情を映しだそうと、各社が新しい技術を競うのも、このカメラなのだ。

慶子は、中継車が大好きだ。

運転席の後ろに、いくつものテレビモニターが並んでいる。球場の各ポジションに設置されたカメラから送られてくる映像を映しだすいくつかのモニター。放送に使う

画を映しだしているメインモニター。テレビ局が放映中の番組を映し出しているモニター。

いくつものカメラが映し出した映像を、素早く選択して、放送用のモニターに映しだしていくのが、スイッチャーの仕事なのだ。指示を出すのはディレクターの仕事だが、スイッチャーが独自に画を選んでしまう場合もある。ディレクターとスイッチャーの息が合っていないと、中継はぎこちないものになってしまう。だから、ディレクターとスイッチャーは、コンビを組んでいることが多くて、正道と誠も、特別なことがないかぎりには、一緒に仕事をしている。

中継車の後部には、ビデオや音声用の機械が、左右に分かれて、天井まで設置されている。運転席以外に窓のない中継車は、マシンの塊なのだ。

慶子は、いつかは、この中継車のディレクターの椅子に座りたいと思っている。

「解説の関根さんが、仰木監督おおくみの話題を追っていきたいそうですから、ベンチの画えをよろしく願います」

慶子は、正道に向かって言って、中継車を出ていった。

「慶子、何か怒ってたんじゃないのか？」

慶子が中継車を出ていくと、すぐに誠が言った。VTRのエンジニアや音声ミキサの連中は、中継前の一服を^{いっしょく}しに表に出たらしくて、中継車の中には、誠と正道しかないかった。

「うん……」

「これか？」

誠が、小指を立てる。

「隣の女だよ」

「マンションの？」

「そう……」

「あの派手目の女か？」

「そう……」

「どうしたんだ？」

「デートした」

「それだけか？」

「帰り道にキスをした」

「それだけか？」

「私の部屋に寄っていかないっていうから……」

「どうした？」

「寄った」

「それじゃ、慶子が怒るの無理はない」

「昨日、慶子に怒鳴りつけられたよ」

「何て？」

昨夜、マンションに帰ると、慶子がすでに来ていた。帰りが遅くなるから、先に行つて待つてくれと、慶子にキイを渡してあったのだ。正道が帰りつくまでに、隣の女が部屋を訪ねてきたらしく、女のこととは、すでに慶子にバレてしまっていた。

慶子の顔を見たとなんに、まずいことになったなと思って、正道は、わざとおどけたような声を出した。

「何を怒ってるのよ、慶子ちゃん？」

「そのくらいのこと分からんのか、このアホンダラが！」

慶子が、いきなり関西弁で怒鳴りつけた。正道はびっくりして、まじまじ慶子の顔

を見てしまった。

「自分の胸に聞けば、そのくらいのこと分かるやろうが！ あっちにもこっちにも、女を作って、あっちからもこっちからも、電話がかかってきて……じゃ、また電話をします……後で必ず電話をする……テレビのチャンネルを切り換えるように女を切り換えて、一チャンは郁子、三チャンは光代、四は由子で、六は睦美、八は弥生で、十は登志子、十二チャンネルに衛星放送。あっちの女が具合が悪くなったら、こっちの女。こっちの女が面白くなかったら、あっちの女。一人の女ともまともに付き合えなくて、それでも、男か！

お前みたいなアホンダラと付き合うた、こっちが悪かったんや。どいてんか、このチャンネル男！」

慶子は、しゃべりまくると、正道を突きのけるようにして、マンションを出ていった。

慶子がいなくなっただけから、正道は、しばらく驚きから覚めずに、部屋の中に立ちつくしていた。

「慶子が、関西弁で啖呵^{たんか}を切ったのか？」

誠も、信じられない顔をした。

「あいつの関西弁を聞いたのは、初めてだった」

慶子の実家は、大阪の高槻^{たかづき}にある。テレビ局に就職しただけあって、慶子は、きれいな標準語を話して、いままで一度も、出身地を思い出させるようなしゃべり方をしたことはなかったのだ。

「ま、仕様がない」

「何が？」

「チャネル男だとはよく言ったもんだよ。慶子の言う通りだ」

「郁子に光代に由子に睦美……おれ、そんな女に心当たらないぞ」

「それは、慶子の例え話だよ。でも、慶子の言う通りだ」

「何が？」

「お前の女との付き合い方だよ」

中継車の中にも、外線と話の出来る電話がある。中継前に、よく、女から正道に電話がかかってきていたのは、誠も知っている。局にいる時は、もっとひんぱんにかかってきて、「後で、また電話をする、後で必ず電話をする」というのは、正道の口癖（くぐせ）みたいになっていたのだ。

「あっちの女が具合悪（ぐあい）くなったら、こっちの女……こっちの女が面白くなくなったら、あっちの女……慶子は、よくお前のことを見てるよ」

正道も、慶子に怒鳴りつけられながら、まさにその通りだと思ったのだ。テレビ局のディレクターというのは、よくもてる。スポーツのディレクターとなると、もっともてる。もてることをいいことに、あっちの女、こっちの女と、テレビのチャンネルを切り換えるように付き合ってきたことは、事実なのだ。慶子に言われてみると、まさにチャンネル男だった。

「昇進祝いの日か？」

誠が、スイッチャー卓の上でいろんな指を動かしてみながら言った。中継が始まると、スイッチャーというのは、迅速（じんすん）な指の動きを要求される。

「何が？」

「慶子と、そんな関係になったの」

「うん……」

一月ほど前、中央テレビとしては、女性で初めての放送室のディレクターとなった慶子の昇格祝いが、西麻布^{にしあきぶ}であった。三次会まで盛り上がって、最後は、正道が、慶子を送っていくことになったのだ。

「おれのところに寄っていくか？」

酔った勢いもあって、半分は冗談^{じやうだん}で、正道は言ったのだ。慶子は、しばらく答えなかったが、しばらくして、黙ったままで大きくうなずいた。

その時は、酔った勢いだったが、次の時には、二人とも酔っていなかった。遅くなるからと、慶子にキイを渡したのは、三度目の時だった。

「慶子は、お前のことを本気で好きだったんじゃないのか？」

「うん……」

「遊び相手にする女じゃないぞ、慶子は」

「分かってるよ。でも、あいつは、愛想^{あいさく}なしで、クソ真面目^{まじめ}で、NHKみたいな女だぞ。毎日毎日NHKだけを見て、暮らせるか、お前」

「おれは、暮らせる」

誠が怒ったように言った。

その時、インカムに慶子の声が飛び込んできた。

「放送室、青木から、車、村田さん」

「車です」

正道が答える。

「入りの画を、もう一度確認したいと思います」

「デストラーデのホームランのVTRを出してから、球場のロング」

「了解……」

「近鉄が、このまま攻撃中の場合は、絶好調の石井選手の話題から入りたいとアナが言ってますので、よろしく」

「了解」

慶子の声が切れた。

慶子がディレクターをしている放送室は、ネット裏にある。放送室には、解説者や中継のアナウンサーなどがいて、画面に映ることこそめったにないが、音声は、放送

中ずっと流れている。それを仕切っていくのは、なかなか大変な仕事なのだ。

本来は、男の仕事であるスポーツ中継のディレクターに慶子がなれたのは、負けん気と熱心さもさることながら、慶子の、女には珍しい性格の歯切れのよさが、局の上層部に認められたからだだった。

「放送室、青木から、車、村田さん。本日の中継、よろしくお願いします！」

慶子の元気のいい声が、インカムから流れてきた。放送二分前だ。昨夜、喧嘩のあげくに別れ話をしたことなど、声には、まったく表れていない。

「了解、よろしく」

と、正道は答えながら、性格と同じくらいに歯切れのいい、慶子の引き締まった肉体を思い出していた。

「酔った勢いでこんなことになりたくなかった」

マンションに来ておきながら、そう言っ、正道の腕の中で暴れてみせた慶子。そのくせ、激しく正道に抱きついてきた慶子。性格の歯切れのよさとは、まったく正反對に、その夜の慶子は、自分の感情を持てあましていた。

遊びなれた正道にとって、そんな慶子の姿は新鮮ではあったが、他の女との関係を断ち切らせるほどの魅力があったわけではない。性的な魅力からいうと、慶子は、味の薄い、淡泊な白身魚でしかなかった。

しかし、正道は、今、慶子とこのまま別れたくないと切実に思っていた。

「慶子は、お前にまだ未練があるよ」

誠が、正道の心を見透かすように言った。

「どうして？」

「自分で持つてこなくてもいい、公式記録を持つてきてるじゃないか」

中継寸前で、音声やVTRのエンジニアたちも車にもどってきていた。慶子の持つてきた紙をヒラヒラと振って見せながら、誠が小声でささやいた。

「本社から、車」

局のディレクターの声が飛び込んできた。中継車から送る映像を、実際に放送する調整室が、テレビ局にある。実況中継というのは、本社と中継車と放送室の巧みな連携プレーで行われているのだ。

「車です」